

特科射撃について

柴田 幹雄 陸自75

もう20年も昔の話だが、複数の師団を並列して攻撃をするCPXに参加した。敵は防御をしており、我は先遣部隊が敵に接触して対峙中で、そこから攻撃を再開するという想定だった。

演習方面隊の計画では攻撃準備射撃は1時間ということだったが、各師団の特科連隊を合わせ指揮する方面特科隊長はさすがに1時間では不足であるとして倍の2時間の射撃を実施した。

その後、攻撃を開始したのだが、我が戦車群は攻撃開始して5分ほどではほぼ全滅の判定となった。3個師団を並列して行った攻撃も損害が続出し、1週間で万単位の死傷者が出た。状況上毎日数千人が補充されたが、CPXだからできたものの、方面の作戦でそんなに損害が出たら日本国家は戦争継続意思を失うだろう。これは事前の攻撃準備射撃などによる敵戦力の減殺が不十分で、圧倒的戦力差になる以前に攻撃を開始したことが原因であった。

防大の学生の頃、戦闘訓練の状況では常に「攻撃準備射撃は0520から0600までの40分間、突撃支援射撃

は3分、2分、3分……」とお題目のよう
に教官が言う。生意気盛りの私は教官、そんな大東亜戦争の時の攻撃準備射撃みたいなのでいいんですか」と質問した。1等陸尉の訓練教官に「馬鹿者大東亜戦争ではない、日露戦争の時からそうやっとなるんだ」と一喝され黙るしかなかった（日露戦争でも各師団の攻撃に際し長時間の砲撃を行っている）。部隊の大きさによっても状況は変わるだろうし、CPXの期間が限られるから想定上の制約があったとしても方面クラスの攻撃準備射撃が2時間というのはオーダーが違うのではないか。

大東亜戦争で米軍は日本軍が守備する島を攻撃する際、何日間も艦砲射撃、爆撃を実施している。湾岸戦争でも補給品の集積準備として半年を費やしたが、その間、空爆、巡航ミサイルでイラクの指揮・通信組織、兵站施設を攻撃している。さらに特殊部隊でスカッドを見つけてミサイルを指向させた。

全くの直感的言い方だが、方面レベルの攻撃準備射撃は週単位で、師団でも日単位で、48時間とか72時間といっ

たレベルで実施することを標準とすべきではないか。もちろんこれに航空機による爆撃、巡航ミサイル、攻撃ヘリコプターによる対機甲火力なども組み合わせた、全縦深にわたる攻撃準備打撃を行うことを、攻撃準備の標準的「常識」にしなければならぬ。

特科射撃で言うなら、発見できる射撃目標数や敵の築城程度及び期待する射撃効果などで変化する。目標の種類・状態に応じて、突撃時に累積する射撃効果をどの程度にするかを定め、攻撃準備射撃、攻撃前進間の射撃、突撃支援射撃の射撃要領・弾量などが決まってくる。現在の情報収集、偵察能力からすれば、かなりの射撃目標を発見できるだろう。それぞれの目標への射撃効果は、単に制圧する、相手の行動を抑制させるだけでなく、戦力を撃破するに十分な弾量を撃ち込んでいくことが当然であるという常識にすべきと思う。攻撃準備射撃といえは40分とか1

時間というのが無意識の前提となり思考の制約になっていないか、タカが戦闘訓練の前ぶりの状況付与でも若い幹部の脳への刷り込みになるから、軽々にそのような数字を言うべきでない。

私が1等陸尉のころ、塹壕陣地の攻撃要領を検討提案したことがあって、特科射撃について調べた。主攻撃師団の主攻撃連隊の、その主攻撃中隊の突

撃目標に対する攻撃準備射撃、突撃支援射撃などを、掩蓋陣地を交通壕で結んだいわゆる塹壕陣地に指向するという実射検討した記録をみつけた。当時の基準で最大の弾量を指向したことになるが、かなりのパーセントの敵兵が残存するという結果であった。

現在では特科の装備火砲も155mmが主力で、多連装ロケットなども導入されて当時とは射撃の基準もずいぶん変わって現代戦に即応するようにしていると聞いている。しかし弾薬不足を前提とする意識はあまり変わっていないのではない。

私が普通科連隊長の時の話。ある野営で重迫撃砲の射撃を行った。人手不足で107mm迫撃砲3門だけの射撃だが、そのうちの2門が故障をして射撃不能になった。弾薬もケースから出して信管測合も終わっている。射撃指揮官に最大発射速度の射撃をやったことがあるか聞いてみると、ないという。残った一門で準備した砲弾を最大発射速度で撃たせることにした。ところが何発か撃つうちに、FOから「撃ち方待て」ときた。弾着が散り始めたとのこと。連続で射撃したため急激に底盤が沈み始めたことと、装填手が連続して装填するので腕が疲れて弾薬尾部が砲口に当たり砲がぶれ始めたためのようだ。107mmでこれだから、弾薬重

量が倍近くある120mm迫撃砲だったから隊員の疲労はさらに大きく、装填手を交代しながら撃ち続ける必要があるだろう。

特科・重迫の実射訓練といえは、砲列が一発撃って、前進観測者が観測・修正、FDCが修正諸元を算定して砲列に伝えて又撃つという3者連携訓練をよくやっている。これができればあとは同じ諸元で撃つだけだから、訓練要素がなく弾薬もつたいないという発想があるのではないか。射撃諸元が取れたら、「効力射3発」といった号令が耳に残っており、圧倒的弾量で敵を黙らせるというような訓練をしていなかったように思い、反省している。

特科射撃のオーソリティーに聞いたところ「特科部隊では、そういう発想はない。当然3者連携訓練の他にも、色々な実射をおこなっている。最大発射速度の弾幕射撃もやっているが、持続発射速度での長時間射撃はやっていないのではないかとのことだった。



ベトナム戦争のターニングポイントともなったケサン攻防戦の米海兵隊の105mm榴弾砲の射撃中の一枚の写真で、未だに覚えているものがある。それは、射撃中の砲のほぼ全周が、弾薬を入れてあったファイバーケースが放り投げられ、うず高く積み上がってあたたかもケースでできた土手に囲まれているような景況だった。実戦ではこれほどに撃ち続けるのか、何方もの敵に囲まれ、空爆と陣内からの砲撃だけが頼りの戦いではこうなるのか、と強い印象を受けた。

このような連続した射撃をする訓練を自衛隊はあまりしていないと思う。例えば特科連隊が師団の攻撃準備射撃として48時間射撃するとすれば、大隊が交代で撃つとして各大隊が数時間は撃ち続ける訓練をすべきであろう。弾薬輸送、砲側への弾薬運搬、信管測合や残装薬の保管・処理の要領など、訓練・体験しておくべきことは多々あると思う。弾薬量以外の大きな問題は隊員の充足である。各門に必要な隊員数がないので実射訓練では弾薬は当座撃つ弾数をあらかじめ準備した後、その隊員が射撃をする。本来なら射撃する隊員と、弾薬準備、運搬、警戒する隊員など並行的に行動しなければならぬが、訓練に使う弾薬数が少ないがゆえに定数に満たない少人数でもなん

とかなってしまふという一面もある。

外国の武官に「自衛隊は金がないから訓練の弾薬も十分でない」といったら、「日本に金がないと言ったら一体どの国に金があるのか」と言われた。確かに日本は中国にGDPで抜かれたとはいへ、国民の豊かさも含め世界有数の経済大国なのだ。訓練の弾薬は、そのつもりになれば確保できるだろう。問題はむしろ固定観念かもしれない。攻撃準備射撃や第一線からの要求による射撃の弾量の基準などは、もし昔とあまり変わらない発想で算定しているなら、十分に敵を撃破できる弾量にし、弾薬の生産態勢、備蓄、輸送、弾薬車の装備密度など現代戦に適應する制度・編成に直ちに变えてほしいものだ。弾薬使用統制や携行基準などをまず見直すべきだろう。

大東亜戦争は物量で負けたというなら、その物量、特に弾薬などは十分に調達していかねばならない。しかし未だに弾薬不足という強迫観念からくる作戦思想、すなわち少ない弾量で、敵の射撃を妨害、あるいはひるませて、そのすきに敵陣地に緊迫、突入し、あとは突撃部隊の格闘戦に期待するという攻撃のやり方はあまり変わっていないのではと恐れる。

これからはさらに少子化が進み、隊員募集が厳しくなるのみならず、今以

上に人命の尊重が重要になる。ありていに言えば命の値段が高くなり、一人戦死した場合の国家補償額も上がるだろう。先に書いたCPXのように万単位の死傷者が出れば国家補償額の総額も大変なものになる。一人1億円とすれば1万人では1兆円である。陸自の年間予算が1兆数千億円であるから、いかに膨大な額かわかる。であるならば死んだ後に補償金として使うのではなく、装備・弾薬を十分に調達して、隊員を死なせない戦い方を可能にするために使う方がよほど良いだろう。

クロスドメインの戦いが言われる現在だが、宇宙・サイバー・電磁波の領域の戦いは、畢竟火力発揮の前提条件を確保する戦いであり、依然として地上戦の女王は砲兵(特科)であり、地上戦の王者は戦車である。

「たまに撃つ、弾がないのが玉に瑕」という川柳は、中曽根防衛庁長官の頃のことだが、毎年の予算を見れば弾薬調達の予算が大きく増えているとは言えない。人命尊重の時代、敵陣地にはふんだんに弾丸を打ち込むという常識を定着させるべく、弾薬調達を大幅に増加することを、我々の世代が自衛隊を背負っていた時代には申し訳ないと思いつて、後輩の皆さんに期待するところがあります。